

# 英語科

## 新教育課程での高校三年生の指導

——受験準備教育を意識した授業の組み立て——

宮 田 学

### 1. 受験体制と名大附属高

世の中とにかく大学受験の影響が強く現われ、いわゆる「受験体制」が普通科に学ぶ高校生たちを取り巻いている。世間並の「受験体制」から逃れ切ることは不可能であるが、それでも、本校では「本来の高校教育」の実現のために努力している。名大附高が他の多くの普通科高校と異なる点がここにある。筆者なりに、「受験体制」との関係で本校の特色をながめてみると、次の3つに要約できるように思われる。

#### (1) ユニークな選抜制度

本校は中学校（各学年2クラス）と高等学校（各学年3クラス：全日制普通科）の併設された学校であり、われわれ教員も中高併任である。名古屋大学教育学部に附属する学校であり、学校運営の根幹にかかわることは教育学部教授会の下で決定され、実施されている。中学校は義務教育であるという原則と、一方では、公立中学校に近い生徒構成を維持しながら教育活動を行って、はじめて附属中学校としての役割を果たしうるという考え方から、中学校では、ほぼ完全な抽選制度により、定員90名の生徒を選抜している。

高校では、一学年の定員が1クラス分（45名）増える。この増加分と、附属中学校より他の高校へ進学する者の数（1～2割：例年10名前後）を合計した生徒を外部中学校からの応募者より選抜することになる。一次選抜の抽選により200名の生徒を選び、二次選抜（国・数・英の学力検査と内申書）により最終合格者を決定する。この結果、いわゆる「輪切り」にされた一定の生徒層が在籍する高校と異なり、多様な生徒が混在する高校となっている。

なお、以上のような選抜制度は、昭和47年度から50年度の間に定着した。

#### (2) 中高一貫と生徒構成の特質

名大附中は公立中学校並の生徒構成を示すが、生徒たちは、他の多くの公立中学校にみられるような三年時における高校受験のための過熱した準備教育・学習を経験することがない。校内の実力テストや外部の業者テストを受けるとはいえ、公立中学校の三年生に比較すれば顕著な差がある。早朝学習はないし、高校受験用の参考書・問題集を用いた自主学习もない。また、

厳しく枠をはめられた5段階相対評価による数字を、生徒が直接見ることもほとんどない（名大附中では、10段階の絶対評価で通知表をつけている）。

附属中学校で学んだ仲間の多くが附属高校に進む。中学校は、この附属高校と一緒にコの字形校舎の南側に配置され、物理的には1つの学校である。入学式や始業式などの式典はもちろんのこと、朝礼・部・クラブなど、中学生・高校生一緒の機会が多い。われわれ教員は、例えば、1時間目に中1を教えたかと思えば、2時間目は高2を教えている。こんな具合なので、普通の中学生たちが体験するような、中学校から高校へという切り換えに伴う不安感もなければ、緊張感も少ない。受験体制による過度な影響を受けないということは、こうした中高併設、中高一貫の追求という本校の特色に起因している。

#### (3) 自主性・自発性の重視

生徒たちを必要以上に管理せず、生徒たちの自発的な活動を促し、自主的な学習を助長する、という精神は、本校の全体的な雰囲気となっている。教員34名、中高合わせて15クラスという小規模校であることが、このことを可能にしている。しかも、附属高校生の3分の2近くは、中1より高3まで本校に在籍するので、6年という長い期間、親しく接して個々の生徒の成長過程を見守ることができるのである。

自主性・自発性の尊重は、当然、「本来の高校教育」の実現につながる。画一的な管理指導体制よりも、個々の生徒・クラス・学年の特色を生かそうとする。教師一人ひとりの特性も生かされる。必ずしもすべてがうまく行っているわけではないが、個性が生かされる方向で、あらゆる営みが計画され実施される。教師も生徒も、そういった意味で、力が試される。

したがって、早朝学習、補充授業、夏休みの補習授業・合宿などなど、多くの普通科高校にみられる、正規のカリキュラム以外の、進学準備のための授業は組織的に行われることがない。必要と感ずる教師が、必要と感ずる生徒たちを相手に、時おり、補講を行う程度である。しかし、受験準備のための指導がまったくなされていないかということ、そういうことでもない。大学・短大の受験合否状況を校内実力テストとの関係で示した「進路資料集」を毎年発行し、在校生の進路

決定に役立てている。その校内実力テストを、高2で年間2回、高3で4回実施している。また、文系・理系のコースによるクラス分けはしないものの、二年生より選択科目によってアクセントをつけている。三年における文系・理系の大学受験を意識した選択の授業は37%におよんでいる。

参考までに、最近5か年の進路状況を〔資料-1〕に示しておく。

さて、宮田は、昭和60年度に高校三年生の副担任となった。新しい教育課程になって初めてのことであった。高校三年生は、名大附属の目指している「本来の高校教育」という理想が大学受験・就職という現実とぶつかり合うという意味で、とりわけ困難な学年となる。「本校の教育は受験とは一切関係ない」と言い切ってしまうと、受験を間近に控えた生徒たちの授業離れ、さらに塾通いを助長することになりかねない。かと言って、「受験のテクニック教えます」というような姿勢は、本校の存在基盤そのものの喪失につながる危険性をはらんでいる。また、最近の生徒たちにみられる、少ない努力で大きな成果を得ようとする思想・行動タイプや国公立離れの現象を考えると、受験に関係の深い教科・科目での熱心な学習と、関係のない教科・科目の極度な軽視ないしは無視といった状況が十分に予想される。そこで、こうした理想と現実とのバランスをうまくとる、ということが最大の課題となる。

「英語」という教科は、それ固有の教育的目標の他に、英語そのものを使えるようにしなくては何にもならない（実用的目標）という、いわば宿命がある。本校英語科では、このことを十分に認識し、英語科本来の望ましい学習を続けることが、運用力の向上をもたらし、それが、いわゆる受験学力にもつながるという考え方で高校一年の時より指導している。この基本方針を、理想と現実がぶつかり合う高3の段階で実現するための具体策を練ったわけである。以下にそれを具体的展開とともに報告しようと思うが、その前に新しいカリキュラムとその内容について述べておく。

## 2. 本校における英語の新教育課程

学習指導要領が改訂され、高等学校では昭和56年度より学年進行で実施されることになった。59年度に高校一年から三年までの新しい教育課程が完成したわけだが、本校では、次のような形で英語のカリキュラムが組まれた。

- 一年 英語 I (5 単位)
- 二年 英語 II (4) 英語 II C (1 または 2)
- 三年 英語 II B (3) 英語 II (1 または 2)  
英語 II C (2)

英語科では、従来の実践と本校生徒の実態を踏まえて、具体的な授業内容を考えていった。

高1では、5単位を時間割の上で英語 I (週3時間) と Grammar (2時間) に分け、2人の教師がそれぞれの授業を受け持つ。英語 I では検定教科書を用いた授業、Gでは文法分野の指導を副教材を用いて行う。

高2では、英語 II (3時間) と Grammar and Composition (2時間)、さらに選択英語 (1時間) という内容にわけ、3人の教師がそれぞれの授業を担当する。英語 II では検定教科書を用いた授業、CGでは II C の教科書を用いた英作文の授業と副教材を用いた文法・構文の授業を行い、英セでは長文読解の副教材を用いた授業を実施する。

高3では、Readers (3時間)、Grammar, Composition and Comprehension (3時間) および、選択英語 (1時間) の3つに分ける。Rは II B の教科書を用い、習熟度編成 ( $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$  の3クラス) で3人の教師がそれぞれのクラスを担当する。CGでは II C の教科書と II の教科書 (いずれも高2の時の教科書をひきつぐ) を用いた授業、英セでは長文読解の副教材を用いた授業を行う。CGの授業 (通常クラス) を担当する教師が習熟度別の R の授業を1クラス担当するので、延べ4人の教師が高3を指導することになる。

## 3. 一年・二年時の学習の概要とその問題点

次に、一年および二年での学習内容について、そのアウトラインを描いておこう。60年度高3の生徒たちが各学年において用いた教科書・副教材は、〔資料-2〕に示しておいた。

前述のように、本校でも高1に対して「文法」の授業を独立して行っている。高1を中学4年のように位置づけ、「現代社会」「理科 I」などにみられるように、一年で基礎的・総合的に学習しておいて、高2以降の学習につなげてゆくという考え方は、確かに準義務教育化した高校の実情を踏まえたものではあろう。英語科においても、指導要領の前回の改訂 (昭和45年) と今回の改訂 (53年) を経て、かなり多くの文法・文型事項が中学より高校へ移行している。中学校における英語の授業時数が週3時間となった現行指導要領下では、高校一年においても、中学校での学習に類似した「総合英語」として学習を方向づけるということはやはり必要であろう。しかし、中学校の英語学習と高校のそれがまったく同じであってよい、とは言い切れない。すでに述べたように、われわれは中学生も高校生も教えている。他の高校に比較すれば、中学校とのつながりを意識した指導が行いやすく、授業にも中学校的な手法を適宜取り入れている。しかし、中学生には「予習をする必要はまったくありません。塾などで前

もって教えてもらうことなどもっての他。授業に集中し、確実に復習しなさい」と強調する一方で、高校生には一年時より、「高校では予習が不可欠。早い時期に予習の習慣を身につけ、必ず自分なりに調べた上で授業に臨むこと」と注意する。また、中学では文法的な説明は最低限におさえ、まず新しい文法・文型事項に慣れることを目標にして授業を進める。したがって、文法用語も必要最少限しか使わない。一方、高校一年では、中学3年間で学習した言語材料を用いて、品詞、五文型、単文・複文など、文構造にかかわることや基本的な文法を体系的に学習させ、さらに進んだ用法へとつなげてゆこうとすることが圧倒的に多い。

高1に持たせている参考書『アルファ・シリーズ基礎英語』は、実は、宮田が中心になって著したものである。我田引水となるが、この『基礎英語』では、上に述べたような考え方を具体化し、まず第一章で、中学程度の英文を材料にして英文の成り立ちを理解できるようにし、第二章以下では、主な文法事項について、まず「中学で習ったこと」という部分で既習事項を高校英語の観点からまとめ直してから、高校で新しく学習する項目へと移ってゆくように工夫してある。「中学英語から高校英語へのスムーズな段階的学習」をキャッチフレーズにしているのである。また、英語Ⅰ・英語Ⅱによる学年指定にはこだわらず、例えば、英語Ⅱで取り扱うことになっている仮定法や分詞構文についても、そのごく基本的な用法を学習できるように配慮している。そのかわり、if節の省略や独立分詞構文など、高度な表現形式は思い切ってすべてカットしてある。これは、やはり英語の一言語体系としての全体像を、基本的なことに絞り込んでよいから、高1の段階で身につけさせたいと考えたからである。

本校における高1での英語指導は、こうした基本方針を堅持し、週2時間のGの授業で、英文法の基礎を体系的に学習することにしているのである。

さて、従来より、高校段階での英語指導においては、高1で英文法の体系的な学習と英作文の基本、高2で英語の構文を中心とした英文解釈の基礎的学習と英作文力の充実、高3で実力・応用力の養成というようなイメージで、各学年の大目標がごく自然にあった。これが、特に現行指導要領になってからは、高2での指導が、英語Ⅰ→英語Ⅱというからまりの中で、文法の完成という面がどうしても必要となり、構文・解釈までなかなか手が出せない状態となっている。他方、中学校から高校に移った文法・文型事項がかなり多いにもかかわらず、英語ⅡBの教科書では、従来の高3並の英文を扱っているために、構文面、内容面、語彙面のいずれにおいても、かなりのハードスケジュールで教材を消化しなくてはならなくなっている(60年度高

3の使用したⅡBの教科書は例外と言えようか)。また、共通一次試験はいくぶんやさしくなったようだが、各大学・短大の英語の入試問題は、必ずしも従来よりやさしくなったとは言えない。高校を出たあとの進路を大学・短大に求めるならば、高校段階でかなり密度の濃い英語学習を行わないと、入試をクリアするだけの実力をつけられない、というのが実情である。

本校英語科では、新しいカリキュラムの実施以降、なるべく異なった教科書や教材を用いて、効果的な授業の組み立て方を検討しているが、今のところ、高2段階での指導が、このような理由で、うまく機能していないという反省がある。英語ⅡCの学習と並行したCGの授業で、多少、英文解釈的な内容を取り込もうとはするが、どうしても英作文および文法の内容が大半を占めてしまうことになる。

59年度高2については、[資料-2]に示したような教材を用いて指導したわけだが、基本的には、英語Ⅱの教科書を用いた総合的学習をメインに置き、CGの授業では、高1で学習した基本的なことから(英文法の基礎)をさらに充実・発展させることを目標とし、参考書による自学自習を背景にして、英作文(ⅡC)で表現力、演習ノートで文法をからめた総合力アップをはかろうとした。選択英語では、比較的やさしい、まとまりのある英文を楽しく読み進むという目標をたてて、ゆったりとした学習を行った。

#### 4. 昭和60年度三年生の指導の全体像

60年度の高3を、宮田は(中学3年間も含めて)一度も教えたことがなかった。高校最後の学年になって初めて教えるということで、多少の不安が先立った。しかし、逆に言うと、生徒たちとは新鮮な出会いができたわけで、4月の始めから、かなり宮田色を前面に出して指導することも可能であった。例えば、一学期第一回目の授業では、思い切って、母音・子音の発音の確認と発音記号の学習を3枚のプリントを用いて行った。生徒たちの発音に関する知識と実力を知りたかったと同時に、発音を軽視するような片寄った英語学習に警告を発したかったからである。

さて、生徒たちの高1、高2での学習内容および問題点を考慮に入れ、高校3年間の総まとめと、入試準備につながる学習とが同時に行えるようにと、宮田なりに考えて、次のような基本方針を決定した。なお、使用した教科書・副教材は、[資料-2]に示しておいた。

(1) 通常クラスで共通に学習するCG(週3時間)を、C(=ComprehensionまたはComposition: 2時間)とG(=Grammar for Comprehension: 1時間)とに分ける。

(2) Cでは、一学期中間テストまでを英Ⅱの教科書を用いた読解中心の授業、一学期中間テストから二学期中間テストまでを英ⅡCの教科書を用いた英作文の授業、二学期中間テスト以降を再び読解の授業とする。

(3) Gの授業では、生徒たちの弱点となっている項目について整理・統合するとともに、英文解釈への橋渡しとなるような問題を含めて自作のプリントで演習を行う。

(4) 一方、語彙不足を補強するために、一学期に単語、二学期に熟語について体系的な学習ができるように、副教材を与えて自宅学習させ、CGの授業の冒頭でチェックテストを実施する。

(5) さらに、高2の時に自宅学習した『総合英語』のチェックテストが実施されぬまま残っていたので、それをもらい受けて、実施することを考える。

(6) 習熟度別クラスで実施するR(週3時間)では、英文の構造理解を徹底学習するための副教材を与え、各レベルに合った用い方を工夫するとともに(週1時間)、英ⅡBの教科書を用いた授業(週2時間)を行う。宮田は、学力層上位3分の1のクラス(αクラス)を担当した。中位・下位のβ・γクラスの指導については、担当の先生に全面的にお任せした。(高3における習熟度別クラスでの指導例とその分析については、本校紀要第25集の拙稿「学力差を考慮した英語の指導」を参照していただきたい)

(7) 週1時間の文系選択英語では、速読を目標とする授業を行う。内容と方法は、担当の先生に一任した。

## 5. Cの授業展開

英Ⅱの教科書を用いた授業は、大体、次のような手順に進めた。

- 1) 『実トレ英単語』のチェックテスト実施(3分)  
→自己採点→教師のあとについて発音練習
- 2) 前時の復習
  - ①本文の聞き取り、または、指名された生徒による音読
  - ②概要の確認
- 3) 本時の学習
  - ①新出語句の発音練習
  - ②本文の聞きとり(テープ使用)
  - ③大意把握:日本語によるQ-A
  - ④詳しい解釈:自作プリント(For the Better Understanding)併用

教科書の学習では、語句や構文を詳しく解釈する前に、全体の概要把握を行う授業を展開した。3)の③にこの意図が反映されているが、さらに、自作プリン

ト“For the Better Understanding”では必ず“Summary”の項目を設け、Lesson全体の内容理解を目指すように心がけた。このプリントは、通常クラスでの授業ということを考え、特に中位～下位の学力層の生徒たちが、予習をする際の文法・語法面での目のつけどころがわかるようにという配慮とともに、文脈把握という観点から、指示語の内容や、筆者の論旨を明確にするようなポイントを設定した。具体例を[資料-3]に示しておく。

英ⅡCの教科書を用いた授業では、2つの課を3時間で消化できるように、1回目に2つの課の解説と暗唱文の練習、2回目と3回目に、それぞれの課のExercises(和文英訳15題程度)の答え合わせと暗唱文のチェックテストという要領で進めていった。この内、第2回目を例にとって、授業の展開例を示しておく。

- 1) 『実トレ英単語』のチェックテスト実施
- 2) Exercisesの答え合わせ
  - ①指名された生徒が黒板の指定された場所に自分の考えた英文を書く。
  - ②指名されなかった生徒たちは、暗唱文のチェックテスト(空所補充問題にしてあるもの)を各自でやる。
  - ③教師が黒板に書かれた英文をチェックし、解説を加える。
- 3) 『総合英語』のチェックテスト実施(3～5分)  
→解答配布(自己採点)

## 6. Gの授業展開

Gは、年間を通して、9つの項目を扱った。2時間で1項目終わることを原則とし、最初の時間に講義形式でその項目の解説と、例文またはプリントによる学習を行い、この時間の最後に配布されたプリントの演習問題を次の時間に答え合わせするという方式を採った。扱った項目は宮田なりに考えて、生徒たちがつまずきやすい項目、あるいは、まとめ直して全体像をつかんでおくとよい項目とし、英文の構造理解や英文解釈の時の手助けとなるような方向で整理してやった。例えば、本校英語科で数年前に「文構造の理解と内容把握——andを中心に——」(本校紀要第23集および第24集に報告)と題する共同研究を行ったことがある。この成果を宮田なりにアレンジして、andが文中で果たす役割に注目させ、語レベル、句レベル、節レベルでの構造把握を適確に行うことを目的として「andの用法」という項目を設定した。最初の時間に、接続詞の基本的な役割について復習したあと、andが様々なものを結びつけることを示す具体例を分類したプリントを配布して、体系的な学習を行った。演習問題のプ

プリントでは、andの用法に関する基本的なことから、定着度をためす問題から、やや高度な解釈問題までをコンパクトにまとめた。この「andの用法」の指導用に作成したまとめのプリントと、演習問題用のプリントより一部を抜粋して〔資料-4〕に示しておく。

## 7. R (αクラス) の授業展開

使用した教科書は、第I部(語義推定・文脈把握などのための練習問題)、第II部(比較的やさしい教材を用いた速読)、第III部(比較的高度な教材による精読)から成っている。第I部と第II部を並行して進め、第III部へと移っていった。αクラスの生徒たちは、基本的な文法・文型事項に関する知識・運用力ともに備わっており、専ら英文の直読直解に努めるような授業を心がけた。したがって、和訳作業はごくわずかとなり、少ない時で1ページに1か所、多い時でも3~4か所程度であった。しかし、扱われている内容や英文の程度によって柔軟に対処し、例えば、第III部のLesson 2 "The Queen of the Adriatic"は、授業展開をガラリと変え、全文を和訳させてみた。しかし、それ以外のLessonでは、Cの英IIの教科書を用いた読解の授業に近似していた。ただ、プリントは用いず、その時間内にポイントを示して考えさせた。

『英語構文』のテキストを用いた授業では、パラグラフの読み取り練習ということに目標を置き、解説や短文のExercisesはすべてカットし、各セクションに2つずつある5~6行から成るパラグラフの解釈を中心に行った。まず、第一段階として、一学期は、全文和訳を課し、指名された生徒の和訳文から逆に構文上・語法上あるいは文脈上の誤りを推定し、正しい把握の仕方を示すという授業方法を採用した。一学期末テストから二学期末までの授業では、パラグラフ全体の要旨に目を向ける学習を目指し、〔資料-5〕のような内容のプリントを用意して、あらかじめポイントを考えさせておいてから授業を行うもの(第二段階)から、その授業時間内にポイントを示して考えさせるもの(第三段階)へと進めていった。つまり、枝葉末節にこだわる段階から、次第に大きく全体を、しかも自分の力で短時間のうちにとらえる読み方へと導こうとしたのである。

## 8. 二学期末テストから三学期の指導

二学期の期末テストが終了してから三学期の1月末までの短い期間(正味1か月)に何を学習するのかを考えてみた。いつもこの時期は、受験大学の決定や出願の手続き、さらに共通一次試験・私大受験に向けての直前の準備などが重なり、生徒たちの心は、やはり「受験」へと向いている。「本来の高校教育」を目指

そうにも、かんじんの生徒たちの心が受験に向いている限りは、実りの少ないものになってしまう。したがって、ここはギリギリのところでの妥協が必要であろうと考えた。

そこで、生徒たちの受験準備として得点力アップにつながるようなもの、しかも、短時間で行えることは何かを考え、次の3つの柱を立てて、CGの授業で実施したのである。

(1) 発音・アクセントに関する学習

(2) 文法問題の基礎演習

(3) 速読の練習

発音については、すでに述べたように、4月の冒頭の授業で取り上げて練習した。『実トレ英単語』を用いた自宅での学習を着実に行わせるというねらいもあった。一学期から二学期の授業では、この『実トレ英単語』のチェックテスト後の発音練習をはじめ、教科書の新出単語の練習などを行ったものの、集中的に徹底した形で行ったことはなかった。そこで、この機会に2つのことを並行して行い、10回ほどで完了するプランを立ててみた。

1つは、フォニックスのルールをまとめて学習するものであった。主に、竹林滋著『英諸のフォニックス——綴り字と発音のルール』(ジャパントイムズ、昭和56年)に示されたルールと例を宮田なりにアレンジして、プリントを作成し、授業の冒頭に行った。ルールの中からわかりやすく、かつ重要と思われるものを整理整頓して18に絞り、生徒たちの既知のことがらに結びつけられるように具体例を工夫した。

一方、『重要英語発音・アクセント700選』のテキストを全員に持たせて、フォニックスの学習につづき、毎回5分ほど発音ドリルを行った。このテキストでは、単語・発音記号・品詞名・主な意味(日本語)が与えられているので、語彙の再学習にもなった。

文法問題の基礎演習については、『総合英語』でまだ実施していないチェックテストを実施する他、英IIの教科書の巻末に13ページにわたって掲載されている補充問題の中から、書き換え問題に絞って、英作文の添削と同じ要領で答え合わせを行った。典型的な書き換え問題であったにもかかわらず、結構まちがえる生徒が出てきて、基礎の徹底にはよかったと思われる。

速読練習は、英IIの教科書にFor Rapid Readingとして2つの教材があったので、そのまま利用した。また、CGではないが、Rのαクラスでは、毎時間冒頭の3~5分を用いて、速読用のプリントに取り組みさせた。砂時計を教卓の上に置き、緊張感を作り出して行った。

## 9. 生徒の反応

以上、60年度の高3における英語指導についてのあらましを述べてきたが、大学受験に向けて全校的な規模で指導にあっている立場から見れば、まだまだ不十分どころが目立つと思われる。しかし、例えば、単語・熟語の受験用副教材を用いて家庭学習させたのは、今回が初めてのことであったが、冒頭で述べたような本校の体制の中では、例外的な試みなのである。

さて、1年間にわたる宮田の試みに対して生徒たちはどのように感じたのかをみよう、1月下旬の最後の授業でアンケートを実施してみた。その結果をまとめて、次のページに紹介しておく。

アンケート(1)の項目については、平均が3.41~4.00の中に分布しており、「普通(3)」から「まあよかったほう(4)」とする傾向が一般的であったことがわかる。特に発音・アクセントの学習に関する支持率が高いのは、入試直前の効果という点を意識していたからと思われ、宮田の意図をほぼ達成できたと言えようか。アンケートの(2)と(3)を比較してみると英作文での「わかりにくさ」を感じた生徒が11%であったにもかかわらず、読解の授業の方では24%もいたのが気にかかる。これは、やはり、教材の難易度と大いに関係があると考えられる。英作文の授業は、比較的短い和文の英訳が中心となり、高3としては取り組みやすいものであった。一方、読解で取り組んだ英文は、英Ⅱの教科書の後半部分だけあって、構文も内容もかなり高度なものであった。しかも、「和訳作業を少なくして全体の概要をつかむこと」をねらいに置き、全文和訳や細部にわたる説明を避けたため、特に中位~下位の生徒にとっては、スピードも内容もその程度を越えることが多かったと思われる。この読解の授業に関するアンケートの回答をRの $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ のクラス別に集計し直してみると、次のようになり、 $\beta$ および $\gamma$ クラスの生徒層にとっては、わかりにくい授業となってしまうことがわかる。

| Rクラス | $\alpha$ | $\beta$ | $\gamma$ |
|------|----------|---------|----------|
| ア    | 11%      | 0%      | 4%       |
| イ    | 42       | 38      | 26       |
| ウ    | 36       | 29      | 39       |
| エ    | 11       | 32      | 22       |
| オ    | 0        | 0       | 9        |

このことは、「それはなぜですか?」に対する回答をみてもわかる。

アンケート(4)のGの授業に関しては、全体の7割の生徒が「(とても)役立った」と答えているのでおおむね好評であったと言える。9つの項目でベスト

3に入った「比較の構文」「thatの用法」「andの用法」は、いずれも二学期に扱ったものであった。一学期に扱った項目が入らなかったのは、時間の経過とともに印象が薄れるということが作用したかも知れないが、ある程度基礎固めの終わった段階において「英文の構造理解」を困難にしがちな項目に票が集まった結果とも言えるので、今後の指導の1つの目安になると思われる。

『英語構文』を用いた授業に、宮田の予想よりも多くの支持があったのも、これと関係していよう。 $\alpha$ クラスでは「(とても)よかった」とする生徒が64%にもほり、パラグラフ単位の読み取り練習で、英文解釈に開眼した者が多かったように見受けられる。

## 10. 結びにかえて

今回の高3における英語指導の試みは、受験準備指導と本校における教育のあり方との接点を見出すという性格を備えている。長い歴史を持つ本校の紀要において、あまり取り上げられることのなかった内容であるが、あえて、こうした実践を行い、それをありのままに報告する気になったのは、次のように考えたからである。

まず、以前のように、教師側からはさほど受験を意識しなくても、生徒たちがそれ相応の受験準備をし、学校での授業を家庭での自主的な学習に結びつけてくれるというようなことを、現状ではあまり期待できないという認識があった。次に、世の中あげての受験体制の中にあって、その当事者とならざるを得ない高校三年生たちの心理的な状態を考えてやる必要があるということ、さらには、本校でも本校なりの対策を講じてやらないと、送り出す側としての責任を十分に果たせないかも知れないという気持ちがあったからである。最近特に著しくみられる学習意欲の低下は、青年期にある人間としての目標を見失いがちな状況の中で、広く生活意欲全般の低下から来ているのではないかと、いう判断もあった。現在の困難な状況の下では、教師側からの計画的な働きかけが必要とされていると考えたのである。

とはいえ、過程よりも結果を極端に重んずる断片的知識の詰め込み教育や、正規のカリキュラム以外に受験準備のための授業を設定するなどの行き過ぎた受験指導体制には、批判的にならざるをえない。したがって、英語科本来のねらいの実現と受験学力の養成とを、「毎日の授業の充実」ということを通して達成する方向で現実的に解決しようとしたのである。そのためには、魅力的な授業づくりを心がけることは言うまでもないが、生徒たちの受験準備に対する不安感を取り除いてやるような指示や助言を与えたり、適切な教材選

英語の授業についてのアンケート結果 (回答者数93名)

(1) CGの授業では、教科書を用いた学習の他に次のようなことを行いました。それがよいかどうかを5段階で評価して下さい。(数値は評価合計を回答者数で割った平均値)

- 英単語(実トレ)のチェックテスト 3.41
- 英熟語(実トレ)のチェックテスト 3.46
- 『基礎からの総合英語』のチェックテスト 3.79
- フォニックスのまとめとドリル 3.99
- 『重要英語発音・アクセント700選』を用いたドリル 4.00

(2) “New Age”を用いた読解の授業は、

- {ア とてもわかりやすかった 5%
- イ わかりやすかったほう 37
- {ウ ふつう 34
- エ 時々わかりにくいことがあった 22
- {オ わかりにくいことが多かった 2

※それはなぜですか？(代表的な意見をRの所属クラスとともに示す；以下同じ)

- ・プリントがあったので(α, β, γ)
- ・むずかしい所は訳すというのが、内容を理解するのに役立った(α)
- ・段落ごとの簡単な要約がよかった(β)
- ・予習していればわりと楽だったが、三学期はスピードがはやくて大変だったから(α)
- ・少しスピードが速いと思うことがあった(β)
- ・予習不足でついてゆけなかった(β)
- ・自分のレベルよりも上であった(γ)
- ・単語が多くて大変だった(γ)

(3) “Unicorn”を用いた英作文の授業は、

- {ア とてもわかりやすかった 14%
- イ わかりやすかったほう 33
- {ウ ふつう 41
- エ 時々わかりにくいことがあった 8
- {オ わかりにくいことが多かった 3

※それはなぜですか？

- ・添削がていねいだから(α, β, γ)
- ・別解が豊富だったから(α, β)
- ・理解度はともかく、量をこなしたことはひじょうによかった(α)
- ・予習がやりやすかった(β)
- ・自分でやろうと思えば先生は応えてくれる(γ)
- ・復習がやりやすかったから(γ)
- ・なかなか予習が追いつかなかった(β)
- ・わかりやすいが、ペースがはやい(γ)

- ・難しかった(γ)
- ・自分がなまけていたから(γ)

(4) “Grammar for Comprehension”のシリーズは

- {ア とても役立った 23%
- イ 役立ったほう 47
- {ウ 役立ったのも役立たなかった 24
- エ あまり役立たなかった 5
- {オ まったく役立たなかった 1

※1 それはなぜですか？

- ・弱点を補えたから(α)
- ・あいまいな所がよくわかるようになった(α)
- ・苦手なことを重点的に教えてくれたから(α)
- ・わからない文法が理解できた(β)
- ・訳す時にとまどうことが少なくなった。(β)
- ・入試に直接役立つから(β, γ)
- ・基本の確認にもなったし、知らないことがたくさんあった(γ)

- ・文法が弱かったから(γ)
- ・まとめて学習できたから(β, γ)
- ・参考書と違う所があって混乱した(α)
- ・内容が詳しくすぎるから(β)

※2 扱った9つの項目のうち、最もよかったものから順に3つ選ぶとしたらどれでしょう？

(1位に選ばれたら3点, 2位2点, 3位1点として集計した結果を高点順に示す)

- ① 比較の構文 122点
- ② thatの用法 103
- ③ andの用法 89
- ④ itの用法 65
- ⑤ ~ingの用法 57
- ⑥ 承前語句 37
- ⑦ 準動詞 31
- ⑧ 第5文型 19
- ⑨ 8品詞と句・節 10

(5) Rの時間では『英語構文』のテキストを用いた授業も行いましたが、どうでしたか？(カッコ内の数字はαクラスのみについての集計値)

- {ア とてもよかった 13% (17%)
- イ よかった 41 (47)
- {ウ どちらでもない 27 (19)
- エ あまりよくなかった 16 (17)
- {オ まったくよくなかった 2 (0)

※それはなぜですか？(αクラスのみを示す)

- ・英文解釈の一助となった
- ・少し難しいめの英文に慣れることができた
- ・長文を読む練習になった
- ・よかったけど、難しく、そして速い
- ・予習で手いっぱい自分のものにならなかった

択、能率的・効率的な学習指導などが必要とされる。そして、全体を通じて、応用・発展のきく真の学力を養成するような配慮と工夫が不可欠である。

英語は、受験するほとんどの生徒が必要とする教科であり、この報告で述べたような英語科の取り組みが即、他の教科に適用されるべきものとは思っていない。しかし、理想と現実のギャップは、教師として感ずるものと、受験生として感ずるものとは、かなりの隔たりがあるに違いないということを考えるにつけ、もう少し、学校全体で何らかの現実的な対応策を生み出さなくてはならないと感じている。

生徒たちのこうしたことに関する本音を聞き出そうと思い、前述したアンケートの中で、次のようなことをたずねてみた。

本校では、他の多くの普通科高校にみられるような「受験のための指導」（早朝学習、補習授業、強化合宿など）を組織的に行っていません。それは、「本来の高校教育」というものを求めているからです。とはいうものの、進路指導資料集を編集したり、高3では、実力テストを4回実施するなど、「受験」を全く無視しているわけでもありません。

英語科では、4月の最初の授業で話したように「英語の授業を中心に＜予習→授業→再学習＞というサイクルで英語力を徐々につけることが受験学力にも直結する」という考え方で、高1より一貫して、授業を中心にすえた英語教育を行っています。大学受験と高校生活、受験勉強と平常の授業、英語学力の向上という観点から、本校の体制や英語科の考え方について、あなたはどのように思いますか？

ア 今のままでよい

イ もっと受験指導に力を入れるべきである

ウ 「本来の高校教育」を徹底し、受験のことはもっと軽く考えればよい

この回答を集計してみると、次のようになった。

|   | 本校の体制 | 英語科の考え方・方針 |
|---|-------|------------|
| ア | 53%   | 64%        |
| イ | 44    | 31         |
| ウ | 3     | 5          |

本校の体制に関して、生徒たちの意見は半々に分かれるが、英語科のやり方については、現在のような 방식을支持する生徒の数が増える。英語科に受験指導をさ

らに求める生徒は3割程度いる。英語科としては、今以上に受験的な要素を入れることには否定的であるので、3年間の英語学習を通して英語力を身につけ、それが受験学力にもはね返ってゆくような道筋をはっきりさせ、とにかく毎日の繰り返しの中で、生徒たちが地道に努力できるようにすることを考えてやることになろう。

本校の体制や受験教育、英語科のやり方についての生徒たちの生の意見をいくつか紹介して、この報告を終えることにする。〔 〕内はRの所属クラスと男女別を示す。

・受験も大切だとは思いますが、高校ではより大事なこと（友人との授業や部活を通じての人間関係、日常的な社会習慣）+高校生としての社会的に納得のいく教養を得ればよいような気がします。〔α, 男子〕

・受験校にするのもいいかもしれないけれども、現在多い受験校の中で、やはり、高校教育をめざしている学校があってもいいと思います。〔α, 女子〕

・学校の授業の予習・復習をやれば、かなり学力はつくと思う。〔α, 女子〕

・学校が予備校になってしまったら、高校に来る意味がない。大学へ行くために高校に来たということが100%ではないのだから、今のままの名大附が良い。

〔β, 女子〕

・大学受験のための英語ほどつまらんものはない。スラングやことわざなど、おもしろい生きた英語などをもっと紹介してほしい。私は受験のための英語学習は好みません。現状のままか、本来の高校教育をめざしてほしいと思います。〔γ, 男子〕

・他の教科にくらべ、英語は受験に対応できていると思います。〔α, 男子〕

・やはり、学校の校風は大好きですが、高1の時からある程度は意識して、学校の学習・受験への学習・自分の時間をうまくつくりあげれば、高3になってあせることなく、最後まで学校に来て笑っていられると思います。〔α, 女子〕

・自分で受験勉強をすることのむつかしさを実感しました。受験への取り組みは、ひとりの力ではどうしても甘くなり、行き届かない面がたくさん出てきます。英語は、理系・文系どちらに進むにしろ、全員が必ず必要とする教科ですから、一度のテストで進路が決まってしまう現在の状況も考えあわせると、もう少し、受験対策の方にも力を入れて下さい。〔β, 女子〕

・今の本校の英語の授業はたしかにいいと思うけど、実際問題として、ほとんどすべての生徒が受験するのだから、もう少し受験指導をした方がいいと思う。

〔β, 女子〕



・別に今の体制が悪いとは思わないけれど、もう少し受験指導をした方が、もっとのびる人もいると思う。

[ $\gamma$ , 男子]

・この学校では、自分が本当にしっかりしていなければやっていけないと思った。

[ $\gamma$ , 女子]

・建て前だけでは、ごはんは食べられない。時流にさからうのは先生の勝手だが、生徒は(私は)いい大学に行きたい。

[ $\alpha$ , 女子]

・一応、進学校(就職がない)なのだから、もっと力のつくよう、体制をたてなおしてほしい。

[ $\beta$ , 男子]

・実際には受験というものがあるのだから、それなりのことはしてもらわないと、学生としては困る。将来

の仕事につながるんだし、それに先生たちの方が、今のやり方に安穩とつかってて、教育になってない。

[ $\beta$ , 男子]

・1年, 2年の時から、英単語・英熟語をもっと重要視し、3年の3学期は教科書の授業をせずに、大学受験に役立つような問題集をやった方がいいと思います。

[ $\beta$ , 女子]

・やはり、もっと受験指導に力を入れてほしい。私の場合、短大をねらおうとするから、他の新設校は、「短大クラス」というものがあり、そのクラスはとも受験用の授業をしてくれるということを聞いたので。

[ $\gamma$ , 女子]

[資料-1] 最近5か年の進路状況 (「進路資料集」より抜粋: 数字は人数)

| 在籍<br>年度 | 性別 | 大 学 |     | 準 大 | 短 大 |     | 専修各種 | 就 職 | 再受験 | その他 | 合 計 |
|----------|----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|
|          |    | 国立大 | 私 立 |     | 国立大 | 私 立 |      |     |     |     |     |
| 56       | 男  | 5   | 16  | 1   | 0   | 0   | 2    | 1   | 31  | 0   | 55  |
|          | 女  | 8   | 12  | 0   | 3   | 13  | 12   | 8   | 16  | 2   | 74  |
| 57       | 男  | 7   | 18  | 0   | 0   | 0   | 4    | 1   | 23  | 1   | 54  |
|          | 女  | 5   | 14  | 1   | 3   | 19  | 14   | 7   | 10  | 1   | 74  |
| 58       | 男  | 6   | 13  | 0   | 0   | 0   | 5    | 1   | 41  | 0   | 66  |
|          | 女  | 3   | 11  | 0   | 6   | 25  | 6    | 1   | 16  | 1   | 69  |
| 59       | 男  | 8   | 17  | 0   | 0   | 0   | 3    | 1   | 37  | 0   | 66  |
|          | 女  | 6   | 18  | 0   | 6   | 21  | 8    | 1   | 4   | 0   | 64  |
| 60       | 男  | 4   | 14  | 0   | 0   | 0   | 7    | 0   | 40  | 0   | 65  |
|          | 女  | 5   | 19  | 0   | 1   | 16  | 9    | 0   | 19  | 0   | 69  |

[資料-2] 使用教科書・副教材一覧

| 学年(年度)          | 科目(週授業時数)  | 種別                | 名 称   | 出版社                 |
|-----------------|------------|-------------------|---|---------------------|
| 一 年 時<br>(58年度) | 英語 I (3)   | 教科書               | The New Age English 1   | 研究社出版               |
|                 |            | ワークブック            | The New Age English 1   | 研究社出版               |
|                 |            | cf. 指定辞書          | シニア英和辞典   | 旺文社                 |
|                 | G (2)      | 参考書<br>副教材        | アルファ・シリーズ基礎英語<br>Unicorn English Grammar                      | 研究社出版<br>文英堂        |
| 二 年 時<br>(59年度) | 英語 II (3)  | 教科書               | The New Age English 2   | 研究社出版               |
|                 |            | ワークブック            | The New Age English 2   | 研究社出版               |
|                 | CG (2)     | 教科書<br>副教材<br>参考書 | Unicorn English Composition IIC<br>英語演習ノート・グリーン版<br>基礎からの総合英語 | 文英堂<br>数研出版<br>数研出版 |
|                 | 選択英語 (1)   | 副教材               | 速読・演習 英文解釈 (I)  | 研数書院                |
| 三 年 時<br>(60年度) | 英語 IIB (3) | 教科書               | Senior Swan English Course IIB                                | 開拓社                 |
|                 |            | 副教材               | 整理と活用 英語構文  | 数研出版                |
|                 | CG (3)     | 教科書               | The New Age English 2   | 研究社出版               |
|                 |            | 教科書               | Unicorn English Composition IIC                               | 文英堂                 |
|                 |            | 副教材               | 実戦トレーニング・英単語  | 中央図書                |
|                 | 副教材        | 実戦トレーニング・英熟語      | 中央図書  |                     |
|                 | 副教材        | 重要英語発音・アクセント 700選 | 数研出版  |                     |
|                 | 選択英語 (1)   | 副教材               | 速読・演習 英文解釈 (標準編)  | 研数書院                |

[資料-3] プリント“For the Better Understanding”

Lesson 13 : The Population Explosionより抜粋

- [SUMMARY] / 1940年代というのは、人口増加にとってどういう時期だったか？
- 2 人口の爆発的増加が人類にどのような危機をもたらすと指摘されているか？  
(3つにまとめると?)
- 3 危機をのがれる解決策として、どのようなことが提案されているか？

[Points to be CHECKED]

- p.151, 1.2 be filled with ---:
- 1.3 and は何を結んでいるか？  
at the same time:
- 1.8 when は接続詞か関係副詞か？

1.10 became available というのは、どうなったということか？

These とは何を指すか？

under control:

1.11 up to ---:

that time とはいつか？

p.152 [diagramに関して] developing countries と developed countries とどう違うのか？ 日本語は？

6.20 とあるのは、何人ということか？

1.4 be accustomed to ---:

p.153, 1.1 by means of ---:

birth control とは、どんなことか？

1.2 arrival というのは、この場合、どうということか？

1.3 in contrast:

1.5--6 early deaths from disease とはどういうことか？

(以下略)

#### [資料-4] Gの時間に用いたプリント例 「andの用法」

(1) まとめプリント

TYPE V (Verb) : 動詞・不定詞・分詞を結ぶ

- 4) 述語動詞 and 述語動詞 Tom sits under a tree and begins to eat the apple.  
5) 助動詞 + 動詞 and 動詞 You can live and work in the town.  
He was waving his arms and shouting something.  
6) 不定詞 and 不定詞 He tried to go and work there.  
7) 分詞 and 分詞 I saw the fish gathering around me and jumping.

TYPE A (Adjective) : 形容詞・形容詞句・形容詞節を結ぶ

- 8) 形容詞 and 形容詞 + 名詞 Africa has a long and interesting history.  
9) 形容詞 and 形容詞 Portia was beautiful and clever.  
10) 形容詞 +  $\alpha$  and 形容詞 +  $\beta$  What impressed me most was taxis in London---black in color and slow in speed.  
11) 形容詞句 and 形容詞句 More than ever before, attention is turned to the problems of the city and of the people who live in them.  
12) 形容詞節 and 形容詞節 Let's think of something that will make her look foolish, but which won't really hurt her.

(以下略)

(2) 演習問題プリント

A. 次の文の適当な一箇所を "and" を入れると完全な英文になります。その箇所を ^ で示しなさい。

EXAMPLE: Mike ^ Tom are good friends.

- 1 He said he was hungry asked me to give him something to eat.
- 2 Some people may have a tent go camping.
- 3 He was run over by a car carried to the hospital.
- 4 We saw some samll children playing with a cat laughing merrily.
- 5 The old man told us about his big boat strange adventures from Spain to Africa.

(中略)

B. 次の各文中の and は何と何を結んでいますか、指摘しなさい。

- 1 Nobody was interested in art and the works of Greeks and Romans remained under the ruins of their cities.
- 2 I thought perhaps he was a little sick and after giving him the capsules at eleven o'clock I went out for a while.
- 3 Many valuable stones are found in and around the village and elsewhere in the country.
- 4 When you were a child, you discovered what words meant by keeping your eyes and ears open and seeing what happened when your parents used words.
- 5 Let's tell her that the exam results are on the notice board and that she has failed.

(以下略)

[資料-5] パラグラフの内容把握のためのプリントより (抜粋)

- §48-2 筆者はどこの人で、どこへ行った時のことを述べているのか?  
3 The sun is being revivedと考えているのは、どういう理由によるのか?
- §49-2 I found surprises とあるが、surprises とは何のことか?  
3 落書きについての筆者の意見をまとめよ。
- §50-2 カーボーイの生活の実態は?  
3 take this into considerationのthisとは、どんなことか?
- §51-2 夢についての筆者の意見をまとめよ。  
3 人々は自由を使いこなせるのか、こなせないのか? それはなぜか?
- §52-2 筆者は何をやるうと思って "peach" とラベルのついたものを買ってきたのか?  
その結果は?  
3 教育を考える時に、何が重要だと筆者は言っているのか?